

第二章

問 条約改正において、自由民権派含め知識人は法権回復を第一としたが、政府は関税自主権回復を優先させた。双方の主張の背景を説明せよ。

1879

欧州の仮面舞踏会は、なかなかにえげつない。本
 当に正体を隠すやつもいる。けれども、大抵は「隠
 している」ことを楽しんでるだけで、お互いにそ
 れが誰なのか分かってる。仮面を外した後は闇の
 世界など見ていない貴顕紳士に戻る——その分、ど
 んな下品な冗談でも仮面の下でなら許される。そし
 てどんな淑女も、扇子やグラスの陰で、スカートの
 下の秘密を暴かれる。

——お前も乗られたか。

——そんなんじやすまない。絞り尽くされた。

その会話を背後に聞いたとき、またこの淫売が
 やり玉にあがったのかと小さく肩をすくめた。王族
 や上流階級は国をまたいで姻戚関係を持っている。
 カーテンの向こうで言葉を交わしていたのは明らか
 に「国」のやつらだったが、その相手もそうとは限
 らない。知人だったら面白くない、いや面白いかと
 口を歪めて、脇を通ったボーイからカクテルグラス
 を受け取った。それが、思わず傾いだ。

——日本だろ。

危うくこぼすところだった。何の冗談だ、あの愛

想もつかみ所も無い顔の、あの子供みたような体の、
 男が。

男であること自体はそう奇妙な話でもない。男性
 形をとる国は多い。そして国家間の結びつきは人型
 の自分たちの感情に直結する。濃い関係性は自然に
 性的関係として顕現する。そうして神への言い訳を
 手に入れた国々は、決して国民には知られないよう
 にして鶏姦にふける。

——あいつ、誰にでもすぐ股を開くんだな。

そんな風には見えなかった。何を考えているか分
 からないとは思った、意外にくえないやつだとも思
 っていた。けれども、性的なイメージからは遠かつ
 た。

仮面で公序良俗から口を遠ざけて、噂話は続けら
 れた。具体的な器官や行為の名を挙げて、日本にし
 たこと、されたことを彼らは言い続けた。思春期の
 少年でもなし、そんな言葉で顔を赤らめるような純
 情は持ち合わせていないが、主語があつた国だと考え
 ると盗み聞きが止められない。まるで三文小説のよ
 うな手練手管が、しかしどうにもあの日本の顔で思

い描けず、わずかに苛立ちを感じた。周知の事実として語られている日本の痴態を、自分だけ知らない。娼婦のように誘いかける日本、身をくねらせ熱い息を漏らす日本――

「くそっ」

心中小さく吐き捨てて、顔を背けると視界の端でバルコニーに通じるドアが音も無く開閉するのが見えた。

「――」

靴音を潜めてホールを横切り、ドアを開ける。バルコニーは建物にぐるりと巡らせてあるが庭園に面した南側と違い、こちら側はただの通路状になっていて、人気も無い。その端に、想像通り小さな影があった。他と同じように仮面をつけていても、見間違えようのないその身長と、黒い髪――

日本は、気配を察したか、腕は手すりに預けたままこちらを振り返った。が、こちらが黙ったままなのに首を傾げ、また顔を正面に戻した。

「……やあ」

その声に、日本はまた向き直った。

「今晚は、よい夜ですね」

ぞくりとした。夜に溶け込むような、低い、少し潤んだような声。日本と会話したことはそれなりにある筈だが、こんな声を聞いたことはなかった。これが愛想を見せた声なのか。

聞いたことがない、と改めて思うと、先ほどの苛立ちがぶり返してきた。媚びを売る相手ではないと見切られているのか。確かに地勢的には縁遠いが、日本にとっては最大貿易相手国だ。ヨーロッパ大不況で買い付け額は激減し、日本も財政失策もあって不景気のさなかではあるけれども――そしてロンドン覚書で関税率引き下げに成功して以来輸出超過状態が続いているけれども。

「――誰かを待っていたか？」

「いいえ？」

そこは「あなたを」だろう、と心の中で突っ込む。娼婦のいろはも知らないのか。

「酔い覚ましに空気を吸いに来ただけです」

なるほど、それはなかなかいい誘い文句だが――笑みの一つも付けてくれないと「エスケープするか」

との言葉も出しにくい。そんなことを思っていると、日本は氣付けをするように両手で自分の頬をたたいた。呆氣にとられているうちに、日本は小さく頭を下げる。

「そろそろ戻りますね」

「おい、待て日本」

脇を通り過ぎかけた、その肘を思わずつかむ。

「……なんでしょう、イギリスさん」

心中、舌打ちする。ルール違反は自分が先だ。とはいえ、折角の仮面舞踏会なのに素に戻ってしまった。名前を伏せたままなら、ただ一晩楽しむこともできただろうに。もっとも、こいつにその氣があれば、だが。

無いように見えた。それで思わずかつとなった。何をやっているんだ自分は、と、つかんだ肘を見下ろす。

「……」

「……何かご用ですか」

「あー」

しばらく考えたが、面倒になった。

「悪い」

いきなり仮面をはぎ取られ、日本は目を丸くした。

「なっ……!」

最初から無いものの不在は氣にならないのに、一度身につければ奪われた氣になる。日本はまるで服をはがれた生娘のような表情を見せた。頬に朱を刺し、――目縁をも薄赤くしている。

「……」

泣いたのか、と聞けば否と答えるだろう。実際、涙をこぼしてはいないのではないか。かろうじてこらえた、だからこそその赤みのような氣がする。

きい、とドアの開く音がして、仮面をつけた男が半身を表した。顔を伏せた日本を背で隠し、「失せろ」と顎で示せば、肩をすくめたて男はバルコニーから消えた。

日本は俯いたままだ。

そうか、聞こえていたか、と心の中で呟く。やつらは特に声を潜めてもいなかった。大声でもなかったから会場の隅にいた客にしか聞こえなかっただろうとはいえ。周囲の「人」は「日本」を隠語として

聞いただろうが、「国」なら事実それを指している
と分かったはずだ。

しかし、貶めるための根も葉もない話、にも聞こ
えなかった。それほどに彼らの話は微に入り細を穿
っていた。

つまり、こうだ。日本と彼らの間になんらかの事
実はあった。けれども、日本はそれについて恬とし
て恥じないという態度ではいられない。

——面白い。

幸いと言うべきか、当事者性を免れているから、
全くの第三者として振る舞うことができる。日本に
同情してみせるも、奴らに便乗して高見に立つもこ
ちらの胸三寸だ。もう少し内情を探って、振る舞い
方を考えた方がいい。それには慎重さが要だ。何
せ、関係が良好とは言いがたい。先年日本がアメリ
カと結んだ対等条約に異を唱えて無効化させたばか
りだ。

無言のまま仮面をとると、日本は顔を上げて瞬い
た。

「俺だけつけたままというの、な」

「……すみません」

謝る理由は一つも無いのに、日本は頭を下げた。

「別にお前のためじゃない」

言いながら、奪ったままだった仮面を返した。手
の上のそれをしばらく眺めていたが、やがて日本は
それをポケットにしまった。双方、を言い出した相
手の前でそれをつけられる筈は無い。計算通りだ。

「特に見るところも無い裏庭だが」

そう言つて手すりそばにいざなうと、日本は微苦
笑した。

「イギリスさんのお宅でもないのに」

言いつつ、指を手すりにかける。下腕を手すりに
預けて隣に並ぶと、先ほどよりさらに身長差を意識
した。旋毛が見える。右旋回と左旋回での性格があ
ったつけなどとぼんやり考えていると、顔を庭に向
けたまま日本が口を開いた。

「大凡、お察しだと思うのですが」

「あ?……ああ、いや、別に」

出鼻をくじかれ、言うべき言葉を見失う。別につ
てなんだ。

「私、いろんな方と臥所をともしました」

「……そうか」

分かっていたくせに、明言されたことに少なからぬ衝撃を受けていた。

「でも、挽回を狙つての枕外交ではないです」

「ああ」

それなら一番に誘いをかけるべきは、吉田・エヴアーツ条約に異を唱えた俺だ。

「いや、したいならすればいいんじゃないか。たまるものはたまるんだし、毎日セックスせずにはいられないやつだっているし……って俺のことじゃないぞ、さつき読んでた雑誌に載っていただけだつ」

若干引いた顔をされてしまった。

「……そういう体質では、ないです」

「そうだとは言つてないだろ、ばか！」

恥ずかしさを紛らわすために軽く怒鳴ると、日本はぴっと目を閉じた後、くすりと笑つた。

ときりとする。

「あー……」

髪をかき回す。日本には色んな顔がある、けれど

も、一番素に近いのは今の顔じゃないかと思う。意外な顔を見せられて、計算が飛んでしまった。

「日本、お前は何をしたいんだ？」

目を見て聞くと、まっすぐに見返された。瞳は底が見えないほど黒い。吸いこまれそうになる。

「生き抜きたいのです」

「あ？」

「この激動の時代の中で、私は国民を乗せた一つの船です。沈むわけにはいきません」

「へえ……」

思わず声に出すと、険を含んだ眼差しを返された。

「いや、お前にはその自覚がない、とずっと思っていたから」

「……」

日本は小さく俯いたが、やがて顔を上げた。

「江戸時代には、政治向きのことは公議と諸国に任せておけばよかった。けれども今は全てが私を主語として語られる。ヘスペリア号事件で数万人を殺したのも、デフレで小作人を急増させているのも、私です」

「……」

今東京ではコレラが猛威をふるっている。もともと西日本で流行っていたそれが関東に伝播したのは、おそらく神戸に停泊後横浜に回ったドイツ船へスペリア号が、政府の要求した検疫に応じず、入港を強行したからだ。医学レベルの低い日本の定めた検疫規則など在外外国人が遵守する必要は無いとの主張は、治外法権によつて守られている。

これはちよつと話の方向性が宜しくない。深刻な財政不足を解消するために政府は関税方面の外交努力に全勢力を傾注しているが、新聞はむしろ法権回復を主張して、幕末には大して意識されなかつた条約の「不平等性」とやらを散々書き連ねている。財政赤字に悩む政府は、何よりも先に、低関税による輸入増加にストップをかけたらしいが、人命に直結する話の方が一般人の耳目を集める。駐日英国公使パークスが邪魔をしているのは法権回復交渉では無いというのに、これではまるで俺が日本国民の安全を損ねているかのようだ。

曰く言いがたい顔をしているのを見て取つたの

か、日本は小さく首を振つた。

「お前の国では立憲政体が樹立されていないから自前の近代的法体系で、という皆様の言い分は分かっているのです。我が国でも議会政治の導入は決定事項で、ただタイミングの問題だけです。私としてはとにかく急いでもらいたいのですが、上司たちには綱引きの加減もあるでしょう」

「ふむ。維新三傑がばたばたと逝つたのは痛かつたな」

悼辞には黙礼が返された。国作りの最中にその指導者が病氣や暗殺や、はては政府への反乱で死んでしまった。求心力の落ちた政権中枢が、反対意見が堂々と開陳される場であるところの議会に慎重になるのは、感情的には分からなくも無い。

「そうは言つてもなあ。困るのはお前だよなあ」

呟くと、音がするほどの勢いで日本は顔を上げた。黒い、深い瞳がひたと合わせられる。呼吸もとめたままじつと見上げて、ゆつくりと日本は頭を下げた。

「いや、別に……」

単に思つたことを呟いただけだったのに深く深く

頭を下げるから毒気が抜かれてしまった。いや、抜かれてしまったから、計算も何も無い言葉を零してしまったのかもしれない。

しかし、この展開はむしろ好都合では無いか。たかが軽い同情なのにこんな心に沁みた風なのは、やはり、ドアの向こう、明るい宴会場の中で交わされている下世話な言葉に晒され続けているからだろう。弱っている心にはつけいる隙も多そうだ。

「なあ、さっきの話だけ」

「……はい」

「何か、理由があるんじゃないのか」

優しそうに見えて内実の無い台詞だ。理由はあるに決まっている。それを言う義務は日本にはない。義務があるからじゃない、言いたいと思わせることができれば情報は手に入れられる。

日本はすう、はあと長く息を吐いた。

「……『お手に触れたい』と言ったのです」

「ん？」

「許されたので、触っていたら、手を引かれました。天蓋で人の目を遠ざけた寢床で、布の隔てを取り外

され、許されるままに触れていたら、『おさまりがつかない』と言われ、だから内奥でお慰めしたんです」

「……」

気を抜くと「は？」という間抜けな相づちを打ちそうだった。何を言っているのかよく分からない。

「いいえ、いいえ。言い訳です。私は途中から全て分かっていました。互いの利が一致するならそれも手だと思っただけです。幸いというべきか、私の国には男色の文化があり、多少の性技は心得ていました。

私は、自分の体を使えることを知りました。だから、

——次の方への『お手に触れたい』は、最初から闇を意識してのものだったのです。私は、彼らの言うように、」

ここからはただの自虐になる。ろくに情報が引き出せもしない、そう判別できたから、人差し指の背を唇にあてて、言葉を止めさせた。日本はびくりと震え、目を伏せた。下向きに生えた睫が震えているのが分かる。そっと指を外したが、日本は卑下の言葉を続けはしなかった。

言い訳だと言った。ということは、最初の『お手に触れたい』は、少なくとも日本の意識では誘い文句じゃなかったということだ。いや、それはやっぱり、誤解するだろう。まして手を引かれてそのままベッドに入り込むなら。同衾以外の何をするというのだ。

手に触れたい。たぶんそれが鍵なのだろうが、言葉の意味が、いや意図が分からない。困惑を押し隠しつつ、手すりにおかれていた日本の手に、手を重ねた。肉の薄い、骨張った手。刀を握るからだろう、節はかなり固い。

「……」

手を裏返させると、細く繊細そうな指が、少しあれていた。指で触れようとしたら怯んだように手を握られてしまう。やがて観念したようにゆっくりと開いた指の腹に人差し指をおろし、撫でる。しばらくそうしていると、皮膚と皮膚の接触面の遙か奥、地底から響くような微かな声が聞こえてきた。最初判然としなかったそれは、注意を傾ける内に少しずつまとまり、うねり、形をなしてきた。これは、怨

嗟の声だ。デフレの中で養蚕農家がうめいている。驚いて、思わず手を離す。

「ええ」

日本は頷いた。

「皆さん、ご存じのことと思っていました。肌と肌を合わせれば、朧ながら国情がうかがえるのです」

「——普通、そうそう直接さわりはしないからな」
よほどの蜜月になれば。または——極端に相手
が年若く、子育てのような関係にならなければ。そ
う考えて思い出す。

——いざりす！

船を下りるなり飛び込んでくるアメリカと頬をすりあわせれば、ぴちぴちとした肌からその成長ぶりが感じ取れた。光のような、幻のような儂い記憶だ。

「しかし、そうなら——」

「ええ。私のしようにしていたことは、隠密行為です。なぜなら、『それを』許されたわけではないのですから」

「説明しなかったのか」

「——軽蔑してください」

なるほど、それは黙っておくだろう。触らせろと探らせろではいぶん違う。淫売と思わせて、油断した相手を観察できるなら、名誉など犬に食わせろと思うかもしれない。何せ、国作りの一番大切な時に政府の半分を視察に出さなければならなかったほどの辺境なのだ。

「知らなければならぬのです。私は未だに『半開国』です。何があればその『半』がとれるのか、何をすれば侵略の恐怖を免れるのか。皆さんを出し抜きたいわけではない。ただ、生き残るために、『近代』とは何なのか知る必要があるのです」

「しかし、自分の尻を痛めてまで……」

日本は、くつと眉を顰めた。

「……軽蔑してください。私は、自分を痛めない方法も、快楽を拾う方法も知っています」

「——ああ、そう、か。いや、辛いならいいんだが」

またしどろもどろになってしまった。体を張って生き残りを目指す必死な姿が、腰を振って男を翻弄する淫婦の像に乗っ取られる。快楽、と言った。気

持ちよかったのだ。それを伝えもしただろう、本当の狙いを誤魔化すために。熱い息を吐き、時には睦言も与え——その姿は想像ができるようにいてやりどこか臆で、まるで靴の下の虫さされのようなむず痒さを感じさせた。

見たい。乱れる日本を見てみたい。自分だけがそれを知らない——。

細く息を吐いて不埒な妄想を消した。

不埒な？ いや、十分不埒だろう。そう思うそばから、何が悪い？ と囁く声がする。日本が複数の国とみだらな関係を持つていることは事実で、だから妄想として日本を貶める行為では無い。そして、他国に対して日本がしていることは、多少信義にもとるかもしれないが、日本が嘘をついているわけでもなく、相手国から奪うだけでもない。むしろ十分すぎる見返りを与えている。

国同士の結びつきが人型をとる国々の性的関係に至ることはままあったとはいえ、いや、そういうものだったからこそ、簡単に体を開く国は無かった。体を売るといふ商売も成立しなかったし、男同士で

快樂を追求するのはやはり後ろめたかった。どこの国でも、大抵、性的に飢えている。

無いと思つていた間はなんともなかったのに、存在を知つていて手に入らないものは欲しくてたまらなくなるものだ。

下腹から熱いものがこみ上げてくるのを感じる。そんな自分が苛立たしい。今はそんな動物的な感情に煽られている場合じゃない。

今、日本は、秘密を吐露する唯一の相手として俺を認識している。それも、プライドと性に関わる、心身どちらについてもごくプライベートな秘密だ。

日本が寝た国も寝ていない国もたくさんあるだろうが、その意味を「打ち明けられた」国は無い。しかも、「軽蔑」という言葉を使う日本は、体を呈する自分の行動を、必要悪と思つている——つまり、開き直れないでいる。自分に対する嫌悪感、幾分か、寝た相手への距離感に転化する。だから、今、日本の心に一番近くまで寄つているのは、俺だ。

その判断は、確かにぞくぞくする喜びをもたらした。茫洋としてつかみ所の無い、無防備なくせに存

外したたかな、この国。ユーラシア大陸の東端から地球の四分の一周を超えて、あの黒い瞳がひたと向けられることを想像する。

いい氣になったところで思い出す。日本は、誘いをかけてもこなかったのだ。「誘い」は、寝たいと思つた相手にではなく、視察したいと思つた相手に投げかけられた筈だ。それはつまり、イギリスという国に対して興味が無いということではないのか。また遠くから微かな苛立ちが押し寄せてくる。世界に冠たる大英帝国に、知りたいことがない筈が無い。その程度の国だという認識など世界の誰に対しても許せない。

荒れた心を理性で押しつぶして、日本の手に手を重ねる。はつと見上げてくる黒い瞳に、可能な限り優しげに頷いてやる。

「軽蔑などしない」

「イギリスさん……」

「お前は、必死に生きようとしている。国民を背負うなら当然のことだ。そのためになりふりなど構つていられない時はある。俺だって、泥水を飲んだこ

とだつてあつた。日本、レーゾン・データ国家理性という言葉を知っているか」

ゆつくりと日本は頷いた。

「俺たちは神のための存在じゃない。俺たちは俺たちのために生きる、生き延びる。国家は自己目的的存在である、そう言い切ることで、時代は神学の軌から解放されて、新しい段階に進めたんだ」

「……」

ぱし、ぱしと黒い睫が上下する。扇のようだ。

「走りたければつっ走れ。他人がどう言おうと気にするな。狡猾と言われようが淫乱と言われようが……」

氣にするなど言いながら、あえて直截な言葉を選んだ。狙い通り、日本の目はぐつと踏みとどまるように揺れた。すかさず、言葉をかける。

「……苦しくなったら、俺のところに来い。耳を塞いでいてやるから思う存分弱音を吐けばいい」
ややあつて、日本は柔らかく表情を崩した。

「聞いて頂ける、なのか、聞かないで頂ける、なのか……」

「どちらでも」

執事のように軽く腰を折って見せて、微かな笑顔を見た後、日本の両肩をつかんだ。

「お前の言つたとおり、今の時代は荒海だ。沈むな。胸を張れ」

「……はい」

子供のように頷いて、仕舞つていた仮面を取り出し、日本は光の部屋へ戻つていった。

その伸びた背筋を見送り、左手を握つた。細かつた、けれども、しっかりと筋肉がついていた。

はつとする。

——彼、そんなに華奢じゃなかったよ。

顔を上げてても既に日本の姿はなく、ただ窓から漏れた光だけがバルコニーに落ちていた。

